◇◇◇ シリーズ 「会員のつぶやき」◇◇◇

40年の研究生活を振り返ってHAPPYな研究環境を考える

山口県産業技術センター

五十部　誠一郎

1985年4月に農林水産省に入省し，食品総合研究所に研究職（農業工学）として配属されてから，いくつかの職場を経験してきた．厳密には，その中で入省時の半年間の行政研修，さらに今年（2026年）4月からの山口県産業技術センターの技術コーディネーターとして採用されてからの合計1年足らずが研究を仕事としていない時期である．研究者として過ごした40年を思い返せば，大きく4つのスパンに分けられる．まず研究員として研究手法の習得や研究論文の書き方，さらに実験の実施とその解析などについて，スタッフとして携わり，スキルを身につけていた時期で，9年目にアメリカに1年間留学していた時期まで，個人的にはとても研究が楽しかった時期である．2つ目のスパンは農業工学研究所への異動を経て，当初の配属研究室の室長として戻り，研究テーマの創出，研究計画や研究室での分担などのマネジメントを行いながら研究を進めていった時期で，結構，毎日午前様で忙しく，また色々と弾けていた時期で，充実感が一番あった時期である．そして3つ目は研究管理の立場で色々な雑用に埋もれて，どちらかというと会議などで出張することでストレスを発散していた時期である．最後が，55歳から私立大に教授として採用されて，新しい研究（フードマネジメント分野）や学生の教育を始めた時期である．このように自分の経歴を整理すると，最初の2つの時期は，大学，公設の研究機関，企業の研究開発部門など，研究職として区分されるほとんどすべての人が経験してきた時期だと考える．そのうえで，自分自身の研究活動を振り返ってみると，現在まで研究者として生き残り，自分自身ある程度満足している今日には，いくつかのHAPPYな状況があったと思い，それを皆さんには紹介したい．どのような環境が各自の研究活動を充実するものなのか，あるいはHAPPYにするものなのか，自分の周りの環境とも比べて，なにか変えられることがあれば参考にされたい．

当方が考える理想的な研究環境として以下を挙げる．まず1つ目に研究所での上司と部下の良好な関係と，その間の信頼感と研究者としての独立性の確保である．ほとんどの研究室が教授，室長などのボスの命令一下で，管理されていた状況が多い中，当方が配属された研究室の室長からは色々と指導を受けたが，あくまでもフラットの関係として一人の研究者として対応してくれた．今は，逆に研究室マネジメントとしてこのような理想の状況を維持することが様々なマニュアルなどで規定されている状況であるが，そのような環境とは空気が違いおおらかな雰囲気があった．次に2番目に関係分野でのチームの活動重視と実験作業や研究成果についての情報の共有化がなされていることである．研究者の役割分担化や効率性などから，今はこのような環境で，協働することが難しい気がするが，それが当たり前にできていた．これが研究に関連する情報収集についてもいい環境をもたらしており，正確な情報，最新の研究データや論文に触れられること，さらに研究者が自分の分野を超えた研究知識や研究センスを得ることができ，また個々の研究者間での情報交換をFACE to FACEで行うことができる，そのような情報収集や共有のネットワークがあることが3つめの研究環境である．

加えて，ほとんどの研究者についてはあまり関係ないことかもしれないが，公的な研究機関において税金で養ってもらった身としては，日本のため，国民のため，問題を解決する技術開発をすることで世の中がよくなると考えることで，モチベーションが向上し，やりがいにつながった。このことも，わずかながら研究生活を肯定する要素であった．

以上，手前勝手な話であるが，研究活動真っただ中の皆さんは，是非ともできるだけ，研究しやすい環境でHAPPYな研究生活を送っていただきたい．また皆さんが自分の環境を作っていくことができ始めるスパン2の時期になれば，スパン1として同じセクターで研究を始める方に彼らがHAPPYな環境を確保することも大事である．

五十部誠一郎（Seiichiro ISOBE）
1984年　北海道大学大学院農学研究科農業工学専攻修士課程修了
1985年　農林水産省入省（食品総合研究所製造工学研究室配属）
2009年　（独）農業・食品産業技術総合研究機構食品工学研究領域長
2012年　日本大学生産工学部教授　2023年より特任教授（非常勤）
2026年　山口県産業技術センタープロジェクト推進部コーディネーター

E-mail: isobe.seiichirou@nihon-u.ac.jp

© 2026 Japan Society for Food Engineering